

スキュラの餌食：オデュッセウスの苦悩

吉 武 純 夫

『オデュッセイア』(*Odysseia*) および Apollodoros (『ギリシア神話』(*Bibliotheke*)) の伝える話においては¹、オデュッセウス (Odysseus) はトロイアからの帰りみちにおいて、冥界を訪れた後、長らく留まっていた魔女キルケ (Kirke) の島から解放され、部下とともに故国への船旅を続けるべく送り出される。ただしそのすぐあと、歌声で誘惑するセイレン (Seiren) たちの島の前を通過し、その次に、六人の部下を死なせながら怪物スキュラ (Skylla) のいる断崖の前を切り抜け、ヘーリオス神 (Helios) の島トリナキエ (Thrinakie) に立ち寄った後、嵐で船と部下のすべてを失う。彼は一人マストに捕まって漂流し、女神カリュプソ (Kalypso) の島オーギュギエ (Ogygie) へとたどり着き、そこで5年間引き止められなくてはならない。彼の冒険の中でも、セイレンの島の前を越えたあとは、オデュッセウスの機略縦横な頼もしさもしばらくはお休みとなる²。

中でも、彼がキルケの助言に従って、海水を吸ったり吐いたりする怪物カリュプディス (Charybdis) のいる断崖を避け、スキュラが襲う断崖の前を航行している時、その6つの頭が彼の船から6人の部下をさらって食ってしまう。ここで、彼らの死はひたすら悲痛なものに映る。これは、スキュラの襲撃に際しては、オデュッセウスが守ってやることも何らできずに、むしろ作戦的に彼らを無防備な状態で死なせていながら、自らは彼らの死のおかげで助かっているからである。というのは、『オデュッセイア』においても Apollodoros においてもそうであるが、たとえばトリナキエ船出後の部下たちの死の場合は、彼ら自身の振舞いに対する罰であると理解できるし、また、キュクロプス (Kyklops) によって食われた部下たちの場合も、オデュッセウスの機知と果敢さによって少なからず仇討ちがなされていると思えるようになっていいることと比べるとよく分かる。

スキュラの攻撃による部下の死の悲痛さは、とりわけ『オデュッセイア』において念入りに描かれている。そして、彼らが死んでゆく様子は、オデュッセウスをして、「海上をさまよいながら私が味わったあらゆる苦悩のうちでも、最も悲痛なもの」(*Od.* 12.258-59: 暫定的私訳) で

¹ スキュラのエピソードが語られている箇所は、*Odysseia*, 12.85-100, 108-10, 245-59; Apollodoros, E.7.20-21 である。

² *Odysseia* では、彼がいくぶんその頼もしさを取り戻すのは、カリュプソの島を出てパイアキア (Phaiakia) 人の島 (アイオロス (Aiolos)) に辿り着いた時である。しかし、Apollodoros (E.7.18 以降) においては、彼が故国に戻って求婚者たちの復讐計画を練る時まで、彼のそのような面が表現されることは無い。

あったと言わしめる³。そこにおいて描かれている彼の苦悩と、彼らの死の持つ意義について考えてみるのが本稿の目指すところである。

(1) スキュラ神話の話形

スキュラの神話には多様な話形（ヴァージョン）があり、オデュッセウスの冒険といつもつながっているわけではない。前2世紀以降の作家である Apollodoros が採録しているのは⁴、『オデュッセイア』が採っている話形に近いもので、上に掲げたストーリーは、ほぼ Apollodoros による話形である。ただし、『オデュッセイア』の話形と違うために省いたのは、Apollodoros においてはスキュラの容貌が、「女の顔と胸を持ち、横腹からは犬の6つの頭と12の足が生えている」⁵と表されていることである。スキュラは女性名詞であるものの、『オデュッセイア』は、この怪物が人の女の形をしているとは全く言っておらず、その代わり「これは恐るべき怪物で、その姿を見て嬉しがる者は一人もおるまい……足は12本、いずれもぶらぶらとたれており、頗る長い頸が6つ、その一つ一つに見るも恐ろしい首が載っていて、ぎっしりと詰まった歯が黒き死の恐怖を漲らせて三列に並んでいる。胴体の半分は、洞窟の中に隠れているが、いくつもの首を穴から出して、その場で獲物を漁る」という⁶。一方、彼女が女の容貌を持っているという伝承は前1世紀の Vergilius (『アエネイス』(Aeneis) 3.426-27「美しい胸を持つ乙女であるのは腰の上まで」)⁷などローマ文学で隆盛したが、少なくともアレキサンドリア時代までさかのぼるものであることが、『ウェルギリウス補遺集』(Appendix Vergiliana) 中の『キーリス』(Ciris, 488ff.) から伺われる⁸。ニーソス(Nisos)の娘のスキュラがこの怪物に変身したものだという話形が多いが、Ciris はこれらを別のものとして伝える。また Ovidius (『変身物語』(Metamorphoses), 8.151, 13.749) はクラタイイス(Krataiis)の娘とする⁹。『キーリス』と Ovidius (『変身物語』, 13.730-737, 13.900-14.74) は、乙女のスキュラがどんな事情で変身したかという話を詳しく伝えている。Ovidius の話は前3世紀のギリシア人 Hedyle による『スキュラ』(Skylia) によるものではないかとも言われている¹⁰。

³ οἰκτιστον δὴ κείνο ἐμοῖς ἴδον ὀφθαλμοῖσι / πάντων ὅσσ' ἐμόγησα πόρους ἄλως ἐξερεΐνων.

⁴ Apollodoros の年代については、Hard (1997), ix-xiii を見よ。

⁵ Apollodoros, E.7.20.5-6.

⁶ Od. 12.87-95. 以下の『オデュッセイア』の日本語訳は松平千秋氏による。

⁷ 岡道男・高橋宏幸訳。

⁸ Gantz (1993), 732. Ciris とは、スキュラが変身したとする海鳥の名であり、『キーリス』全体としてはニーソスの娘スキュラの物語である。

⁹ クラタイイスに関する点だけは『オデュッセイア』と同じである。この女については詳細は分らないが、κραταιῆς という語は、「強力な」を意味する形容詞 κρατός から来た語で、「強力な女」を意味する。そのことから、普通の女とは思われないが、Apollonios (Argonautika, 4.828-29) においては、不気味さを特徴とするヘカテ女神 (Hekate) と同一視されている。

¹⁰ Gantz (1993), ibid.

Hedyle のほかに、7-6 世紀の Stesichoros も『スキュラ』という詩を書いたというが、スキュラの親が誰かというわずかな断片を残すだけでその内容は殆ど分かっていない。Hesiodos の『名婦伝』(Ehoiai) からの断片や 5 世紀の Akousilaos の断片も、スキュラが誰の子であるかということの資料として残されているだけである¹¹。

もちろん、スキュラが航海者を襲撃する怪物として描かれている作品は、少なくはない¹²。しかし、その与える難儀を具体的に描いたものは殆どない。前 3 世紀の Apollonios (『アルゴナウティカ』(Argonautika) 4.789-922) と前 1 世紀の Vergilius (『アエネイス』1.200, 3.420-32) では、それぞれアルゴナウタイ (アルゴ号乗組員たち) とアエネアス (Aeneas) の一行が航海してゆくときに、スキュラがいかに危険であるか予言される。ただし、結局はその危険は事前に回避されることになる¹³。Ovidius も、スキュラの変身に至る受難を語った後は、オデュッセウスの部下を遭難させた、とひとこと語るだけで済ませる (『変身物語』14.71)。

これらを見ても、スキュラが、航海者達をどう実際に難儀させ、彼らがいかに苦悩したかという話は、古代からあまり発展することはなく、『オデュッセイア』に描かれた事件が伝説的に引かれるばかりであったというのが実情である。だから、オデュッセウス一行のスキュラによる受難を詳細に語った現存テキストは、『オデュッセイア』とそれを基にしていると考えられる Apollodoros しかない。そこで、『オデュッセイア』におけるスキュラ・エピソードに注目することにしよう。

(2) 『オデュッセイア』における話形と先行する話形

口承叙事詩である『オデュッセイア』の一つひとつのエピソードを研究するときに重視される方法は、『オデュッセイア』成立前にその話のどのような話形が聴衆に知られていたかを想定し¹⁴、それに対して『オデュッセイア』が打ち出した新しいヴァージョンがどんな意味を持っていたかを考察するという方法である。スキュラ・エピソードについてこれを詳細に行ったのは、G. Danek である。

彼は、『オデュッセイア』では独立したものとなっているカリュブデイスとスキュラの 2 体の怪物による 2 つ受難の話が、(英語の 'between Scylla and Charybdis' という熟語にも現れてい

¹¹ Gantz (1993), *ibid.*

¹² 例えば、Aischylos, Euripides, Xenophon, Platon などにも見られる。

¹³ Apollodoros, 1.9.25 も、アルゴナウタイがテティス女神の助けによってこの難所を無事通過したと記している。

¹⁴ そうして想定される話形を *simple story* という。*Odysseia* の聴衆が既知のものとして知っていた形の話であり、*traditional audience* が親しんでいたもので *Odysseia* を鑑賞するための *reference point* とされたものであるという。(Danek (2002), 17)。

るように) もともとは密接に繋がった一つの冒険であったと見られることに注目¹⁵して、この『オデュッセイア』の話形は、既存の simple story を『オデュッセイア』の作者が新たに組かえて作り出したものであるとする。彼は、『オデュッセイア』のスキュラ・カリュブディス・エピソードには、①冒険の報告がオデュッセウスによる1人称の語りでなされている¹⁶、②オデュッセウスはキルケから事前に危険を知らされている、③『オデュッセイア』では、スキュラの襲撃とカリュブディスによる受難を切離して語る、という意匠が凝らされているという。そして、これらの3点を含まない simple story を想定した¹⁷。

それは「オデュッセウス一行はまず、何も知らずにスキュラと出会って6人を食われたので、海峡の反対側へ行くが、折悪しく活動中のカリュブディスのところへと向かってしまい、彼はイチジクの木につかまるが、他の皆は船もろとも難破する」という話形のものであったろうと推定する(18-21)¹⁸。この simple story においてこそ、古いオデュッセウス像 (pre-Odyssean Odysseus) の、「難を逃れる巧みさ (skillfulness)」と「他をギセイにしてまんまと自分だけが助かるという遠慮なさ (lack of scruple)」が、最も sensible なかたちで現れているだろう (21) と言う。

この話形を ‘natural point’ として¹⁹、『オデュッセイア』の新しい話形が示しているものが何であるかを彼は考察する。オデュッセウスが、スキュラは6人の餌食で満足するが戦っても勝ち目はない、とキルケに警告されているにも拘らず、この怪物と戦おうとしてみせるというところには、自らの *hybris* (傲慢) のために部下の命を危機に曝すという、従来言われてきたようなオデュッセウス像 (Segal, 89) とは違って、部下の命を救うために無理をも行おうとするオデュッセウス像が描かれているのだとする。

スキュラ・エピソードで部下を何としてでも救おうとする意思をオデュッセウスに見出すことは確かに可能であろう。しかし、より重要なのは、話がそれだけでは終わらないことである。つまり、救おうとしても、手も足も出すことができず、何もできずじまいになるという現実によって、彼の意思が空しいものとなるということも見逃すべきではない。

そのほかに、Danek の解釈で物足りないことは、オデュッセウスが部下たちにスキュラのことを黙っていたことに触れていないことだ。それはオデュッセウスの善意によるものであったとはいえ、良く評価されるばかりの方策であったのか。結果的には、彼らの死をいっそう惨めにしたものではないか、と疑われる余地がある。少なくとも、彼らの惨めさ、死に様の悲痛さを醸し出すものとなっている。

¹⁵ Reinhardt(1994), 74 も、もともと original fairy tale においてそうであったと考えられる、としている。

¹⁶ この点も、もともと Reinhardt (1994), 73-75 が強調していたことである。

¹⁷ Danek (2002), 18.

¹⁸ Danek (2002), 21.

¹⁹ natural point とは、伝統的ストーリーの「重心」で、それと齟齬するものはすべて、この traditional background をふまえて受け止められるもの、と説明される。Danek (2002), 22.

(3) 『オデュッセイア』のスキュラ・エピソードが描いていること

『オデュッセイア』がいかなる革新を打ち出した作品であるにせよ、そのスキュラ・エピソードの中に描かれているものを、ともかく人の死に対する反応として分析しようとするならば、そこでどういう叙述がなされているかを考えてみなくてはならない。

叙述をやや詳細に追っていこう。12.21-141に、キルケがオデュッセウス一人だけに聞かせた予言が示されている。セイレンたちの声に対処するかを語ったのち、プランクタイ(Planktai)という岩礁のある進路もあるが、2つの大岩に挟まれたもう一方の進路を進むことを勧める。85からは、その片方の大岩の洞窟にすむ恐ろしい怪物スキュラを説明する。「頗る長い頸が6つ、その一つ一つに見るも恐ろしい首がのっけて、ぎっしりと詰った歯が、黒き死の恐怖を漲らせて3列に並んでいる(90-92)」、「スキュレはその一つ一つの頸で、一人ずつ紺青の舳先の船からさらってゆく(99-100)」と予言する。

そのあと、もう一つの大岩の根元では、別の怪物カリュプティスが海水を凄まじい勢いで吐き出したり吸い込んだりしていて、神によってもその危難から救い出されることはできないから、乗員6名を失う覚悟でスキュラの岩の側に船を進めるようにと指示する。オデュッセウスが質問を返すと、「スキュレは恐るべく手強く、凶暴でとても戦える相手ではなく、これを防ぐ手立てはなく、あのようなものからは逃げるに如くはない(119-200)」と言い、戦おうと思ってぐずぐずしていたら「またもや同じ数の首で襲いかかってきて、そなたの身に迫り、同じ数の男をさらいはせぬかと案ぜられる(122-24)」と言う。ただし、怪物の母クラタイイスに救いを求めたら再度の襲撃を止めることができるであろうとも教える。このことは、スキュラの攻撃は避けられないが、最初の6人が犠牲になればあとは助かることができるという公算が成立つことを、オデュッセウスのみならず聴衆にも、しっかりと知らせるものである。

スキュラとカリュプティスというセットに関する予言はここまでで、その後、トリナキエの島で、太陽神の家畜に危害を加えた者は帰国できなくなるとの旨が予言される(127-141)。キルケから受けた予言の報告はここで終わり、あとオデュッセウスはその予言に対応する彼自身の冒険を語る。

部下には耳栓を施して自分だけ魅惑的な歌声を味わいながら、彼らがセイレンの難所を切り抜けた様子がまず200まで語られる。この時点までのオデュッセウスには、キルケの助言(47-54)によるものではあるにしても、(キュクロプスのところで敵を凌いだと同様)知略を用いて、セイレンの挑戦に優位に応じつつ無傷でこれを切り抜けるという頼もしさが見られた²⁰。しかし、それに続いて、カリュプティス・スキュラの海峡を渡る時からは、そのような活躍がいっさいなくなる。

²⁰ Apollodoros, E.7.19では、相手を圧倒することのできなかったセイレンが死ぬという話形まであることを伝えている。*Odysseia*ではこれを採っていないが、それでも彼が彼女らの挑戦に勝利したに等しいということは自明である。

オデュッセウスは、この海峡に差し掛かるにあたって、行く手の大波や轟音に恐れをなした部下たちを激励する(208-21)。この激励の中では、確かにオデュッセウスは以前キュクロプスを相手に自分の「勇気と知略と才覚」(211)とによって難を免れたことを例にあげ²¹、今回も同じように切り抜けることを部下達に期待させる。しかし、キルケの予言を独り占めするべきではないと自ら公言していたにも拘らず(154-55)、スキュラの襲撃は抗いえないし6人の死者は必ず出さねばならないという部分の予言は打明けないばかりか、スキュラという怪物の存在すら何も語らないという方策をとることによって、部下たちをして恐怖を抱かずに漕ぎ進ませようとする。彼自身が(キルケの忠告に反して)戦う装備をして前甲板へ出て行ったのは確かだが²²、海峡を漕ぎ抜けるようにするために部下らを欺いたという現実があることは否めない²³。

そうまでしていても、彼が無力であったことをこのテキストは示している。彼がスキュラと戦う用意をして身構えていても、相手は姿を見せないままで、彼の努力はいっこうに実らない²⁴。彼が相手を見付けるのは、彼がカリュブデイスの凄まじい活動に気をとられてそちらに目をやっているうちに、部下の6人がスキュラの6つの口によって頭上まで啜え上げられた後である。空中に吊り下げられた部下たちが、オデュッセウスの名を呼びかけたり悲鳴を上げたりして手をこちらへ差し伸べながら怪物の口の中に消えてゆく様が、もがく魚にたとえられて描かれる²⁵(249まで)。

ところで、オデュッセウスはこのような様子(*keino*: そのこと)を、彼の放浪生活の中で *oiktiston* (12.258) なものとして見たと言っている²⁶。ここで重要なのは、オデュッセウスが最後の寄留地であるパイアケス(Phaiakes)人の島に至るまでの放浪全体を振り返ったうえでの最上級形で表現しているということである。ここに描かれているのは、襲撃を受けた6人の「惨め

²¹ キュクロプス族のポリュベモス(Polyphemos)を制したことは20.18-21でも再びオデュッセウス自身の誇りとして表されるにしても(De Jong (2001), ad 12.208-12)、スキュラの前では同じようにはいかないのである。

²² ここで彼は予言された6人の部下の死をも防ごうとしていたのか(Danek)、それともただ「敵を見よう」としていただけなのかは、詳しく書かれていないので、確実に判断することはできない。(12.230-32:「まずここから、やがて私の部下に惨禍をもたらすべき、岩棲みのスキュラの姿が見られると思ったからだ。」)

²³ Segal (1994), 33-36は、オーギュギエへの到着に向って、オデュッセウスのトロイア戦争で発揮したリーダー的要素や、部下の統率がだんだんなくなっていく、絶望的状况になる過程が見出されると指摘している。その観点から見ると、スキュラ・エピソードが置かれているのは、部下の統率が全くなくなったトリナキエのエピソードの一手手前であり、まだ部下が頼りにできたセイレンエピソードとの間に位置する。スキュラ・エピソードに描かれたこの「欺き」は、オデュッセウスと部下たちの間の関係破綻の重要な契機に数えることができるかもしれない。

²⁴ 12.232の、「見回しているうちに目が疲れてきた(ἐκκαμνον)」ということ自体、彼の努力が空しいものであり、彼の活力も萎えかけてしまっていることを表している。

²⁵ de Jong (2001), ad 12.251-5は、この魚イメージは部下たちの救うようななさを表すものと言う。

²⁶ 松平訳では「最も憐れ」とされている。οἰκτιστόνは、οἰκτιρόςの中性最上級。原文は上注3を見よ。

さ」だけでなく²⁷、部下を救うことができないという「無力さ」と、戦うつもりでいたのに相手を見つけないことさえできないまま消耗し相手と戦う機会さえ持てないという「空しさ」とである。確かに、餌食を6人だけに抑えて、通過を達成したのは彼の功績であるかもしれない。しかし、それは長として部下を欺いたからできたことであつたし、ひそかに目論んでいたスキュラとの戦いは何もできぬままであつた²⁸。

更に重要なことだが、餌食となつたのがスキュラの首の数とピタリと一致する6人であるということは、①被害が最小限であつたということを示すと同時に、②6人の死だけは海峡通過のためにどうしても必要な代償であつたということをも表している。彼らがこの難所を通り抜けられたのは、かの6人が死んでくれたおかげであつた、という理屈が明確になっているのである。だから、オデュッセウスが欺いて死なせたに等しい部下たちから多大な恩を受けているのであり、その彼らを守るためには結局何をすることもできなかった、とすれば、彼が部下らの死にゆく姿を無力に見つめているさまには彼らに対する「申し訳なさ」あるいは彼自身の「心苦しき」が多分に暗示されているといえよう。

この心苦しきは、同じく部下たちが死ぬにしても、食人族ライストリュゴネス人 (Laistrygones) たちとの戦いで多くの部下が殺されたり、トリナキアからの出航後に部下が全員失われる場合や、ポリュペモスの洞窟で部下が二人ずつ食べられてしまう場合にはさほど感じずに済んだものであつた。それは、最初の場合は、偵察や戦いというコンテキストの中で十分警戒しているはずの者たち自身が殺されたのであり (10.80-132)、次の場合は、オデュッセウスの再三の警告にも拘らず太陽神の家畜を食した部下達が、自身らの罪科のために滅んだということが明らかだからであり (12.262-419. cf.1.6-9)、最後の場合は、部下が先に殺されたのはオデュッセウスも予想しなかつた偶然であつたし、また彼が助かるのも、敵に酒を渡したり脱出法を考案するという彼自身の努力によるものであつたし、さらに、目潰しや名乗りによる敵への仕返しも小気味よく示されていたからである (9.287-505)。これに比するならば、何も知らされぬ部下たちがスキュラに襲われて果てる情景が、彼の数々の試練の中で最も *oiktros* なるものであつたというのは、彼らから恩を受けていながら彼らの命を救うために何一つしてやっていないという彼自身の負い目によって、いっそう効果的になっていると考えられる。

もちろん、*oiktros* という原語は、多くの場合は、話者自身の痛みを表すものではなく、難儀に見舞われる相手の痛み、またはそれを思い浮かべるときの話者の気持ち (憐れみ) を言うもの

²⁷ de Jong (2001), ad 12.245-59 は、オデュッセウスの語り、部下の死のもたらす *pathos* を、245の *μου* などによって、オデュッセウス自身にもかかわる難儀として、描いているという。

²⁸ スキュラが再度の襲撃をしなかつたのは、彼がクラタイイスに祈つたということなのかもしれない (cf. P. Jones, ad 12.258.)。そうであるとしたら、これも彼の功績になるかもしれないが、書かれていないので、そうだと断定することはできない。

である²⁹。しかしここでは少し事情が特別である。*pantôn, hōss' emogēsa* (「私が苦しみとして経験した全ての事々のうちで」) という言葉が伴っているから、*oiktiston* で形容されている *keino* (そのこと) とは、オデュッセウスが自ら体験した痛みとして数えられているのである。この光景を *oiktros* の最上級たらしめているものは何か、を考えるならば、確かに、第一義的に考えられるのは、こちらに手を差し伸べながら名を呼び断末魔の叫びを上げながら徐々に食われていった「部下たちの憐れさ(可哀想さ)」であろう。しかし、そうなることを許し彼らに対して何もしてやれなかった「わが身の心苦しき」もただならぬものであったことを思わせる状況が綿密に表されている。したがって、*oiktros* が、*oiktos* (憐れみ、嘆き) をもたらす様子を表す言葉であることを思い起こすならば、この場合の *oiktiston* とは、「相手に対する憐れみを最大限にもよおす」というよりも、自分自身の痛恨も含めた意味で「最も嘆かわしい」と訳す方が正しいと考えられる³⁰。形容詞を、餌食となった部下たち自体に一致する男性複数形にせずに、*keino* という中性形の代名詞で捉えることによって、かの人物たちとは別の一つの事態として取り上げて、これを *oiktiston* なるものとしているのは、餌食たちの様子を表すだけのものではないことを窺わせる。むしろ、相手への気の毒さと彼自身の悔恨という両義性を許す手立てだと考えられる。

oiktros という語自体がどれだけ話者の後悔を表すものかということは別としても、以上の分析により、オデュッセウスが部下たちのスキュラに食われる光景を *oiktiston* と言い表してまとめるこのスキュラ・エピソードは、全体として、餌食となった部下たちの哀れさと同時に、オデュッセウスの側の負い目の心苦しきをも十分に表わしていると考えられる。

(4) 無駄にはならなかった死

しかしここで、スキュラの餌食になった部下たちは、同僚たちが海峡を通過するために必要な代償となったということに注目したい。というのは、ギリシア文学には、無駄にはならない死を描いた神話が多数あるのだが、その中でスキュラの餌食の物語は特別な位置を占めると考えられるからである。彼らの死の物語は、無駄にはならなかった死の物語の一群の中にどのように位置づけられるのか。

²⁹ Homeros の両叙事詩の中には、*οἰκτιστός* の用例がほかに6件あるが、それらは、妻に惨殺されたアガメムノンの死に様を表した2件 (*Od.* 11.412, 24.34) のほか、エウリュロコスが飢死に全般を形容したものや (*Od.* 12.342)、裏切りに対する復讐として首吊り処刑される女たちの死に様 (*Od.* 22.472)、下女が主人への誓いの担保として自らに呪う死に様 (*Od.* 23.79)、戦争で殺された老人の死体が犬に陵辱される様を表すもの (*Il.* 22.76) である。12.258 以外は、みな第一義的には難儀を受ける相手の痛みを表すものである。

³⁰ Segal (1994), 34 は、アイオロスからもらった風の袋が開けられたときにオデュッセウスは最大限の悲痛を味わった (10.49-52) と言う。しかしそのときは、原因は部下たちにあり、彼の味わった絶望に比べて自責の念は、たとえあったとしてもたかが知れたものであったと考えられる。それに比べると、スキュラ・エピソードが暗示する彼の心苦しきが容易に理解できるであろう。

ギリシア文学の中で、無駄にはならなかった死の筆頭に上げられるのは、神託などにより何かの成就の代償として要求される幾多の人身御供であろう。このモチーフは Euripides が好んで取り上げたものだが、そこに描かれた神話では、神託の要求に応じてなされた人身御供はいつも、空振りに終わらない。最も有名なのはイピゲネイア (Iphigeneia) のそれである。

彼女の犠牲自体のいきさつを描いたエウリピデス『アウリスのイピゲネイア』(Iphigeneia Auliensis) では、アガ멤ノン (Agamemnon) の娘であるイピゲネイアは、アウリスに集結したギリシア軍の船々をトロイアへと送り出すための風を得るために、予言者カルカス (Kalchas) によって必要と言明されたアルテミス (Artemis) への犠牲となるべく、祭壇に送られた。屠られる瞬間に彼女は姿を消し、鹿と置き換えられたともいわれるが³¹、この劇で重要なのは、彼女は自分の死が正義を守る戦争のために必要なことを理解して死を受入れた、ということが明らかにされていることである³²。この犠牲ののちに船出ができるようになったことは言うまでもない。

エウリピデス『ヘラクレスの子どもたち』(Herakleidae) では、ヘラクレス (Herakles) の死後、彼の甥と子供たちは、彼の敵エウリュステウス (Eurystheus) から迫害を受けていて、アテナイ王に助けを求めている。しかしアテナイがエウリュステウスと戦争をして勝利するためには、由緒正しい家柄の娘を犠牲に捧げなければならないと神託が一致して語っている。これを知ったヘラクレスの娘マカリア (Makaria) は、その死を受入れて犠牲に捧げられ、アテナイは戦争に勝利する、という話がこの劇の前半を構成している。

このほか、エウリピデス『フェニキアの女たち』(Phoinissai) では、テーバイがアルゴスとの戦いに勝利するためには王クレオン (Kreon) の息子メノイケウス (Menoikeus) が自ら犠牲になることが必要であると聞かされ、自害して祖国の勝利を保証することになる。エウリピデスの断片『エレクテウス』(Erechtheus) では、アテナイ王エレクテウスが、侵攻してくるエウモルポス (Eumorphos) との戦闘で勝利するためには、自分の娘を犠牲に捧げることが必要だという信託を受け、娘を死なせて敵を撃退することに成功する。この場合、断片なので娘の認識がどうであったかは分らないが、少なくとも(イピゲネイアの例から、最も難色を示すと想定される)彼女らの母プラクシテア (Praxithea) が神託を聞いてこの犠牲に賛同したという。

これらの犠牲の神話は、いずれも古典期のエウリピデスのヴァージョンばかりが有力なものとして伝わっており、それ以前の話形は詳細には分らないものが多い。それでも、少なくとも古典

³¹彼女が死なずにタウリス (Taulis) へと送られたという伝承は、Euripides の『タウリスのイピゲネイア』(Iphigeneia Taurica) の主題をなすが、『アウリスのイピゲネイア』においては、彼女が姿を消し鹿と置換えられた後でも、彼女は「生きてると同時に死んでいる」(I.A. 1612) と表され、彼女が死ななかつたとは断定されていない。この置換えには触れない Aischylos の『アガ멤ノン』においては、彼女は犠牲として神に捧げられたという母親クリュタイムストラの言葉が語られるだけである (Agamemnon, 1417)。

³²トロイア戦争を遂行するためにアガ멤ノンの娘が犠牲に要求されたという話は、Homeros の両叙事詩には見出されない。

期には、その大半は、自分の死がどういう効用をもたらすかを認識した上で、それを自ら受入れるという話形で埋められていると言える。いずれも死によって公共の善が実現されるので、彼らの死は惜しまれながらも、歓迎され称えられる。

無駄にはならない死を描く神話の、もうひとつのタイプとして上げられるのは、犠牲という形ではなく、何かのための交換条件として死が持ち出されるという話形である。その典型をなすのは、『イリアス』(*Ilias*)で語られるアキレウス(Achilleus)の死の受け入れである。彼は、殺された親友パトロクロス(Patroklos)の仇を討つために、ヘクトル(Hector)を殺すことを欲するが、「ヘクトルに続いてそなたにも死の運命が待っている」(II.18.96)という予言を母親から聞かされる。彼はこれに応えて、あたかも自分の死がそのままヘクトルの打倒を意味しているかのごとくに、「すぐにも死んでしまいたいのだ」と言い、このことをはっきり覚悟したうえでヘクトルを討つ。そののち彼は急所に矢を射られて死ぬ(Apollodoros, E.5.3)。彼の早死は、ヘクトルを倒したことの代償となっているのである。

伝説的アテナイ王コドロス(Kodros)の死の物語は、4世紀の弁論家Lykurgosによって紹介されている(Leokrates, 84-91)。コドロスは、スパルタ人が攻めて来ても彼らが自分を殺せば彼らは勝利することはできない、という神託があるのを知り、乞食の格好をして出て行って敵を挑発し、自分が殺されるよう自ら画策して、スパルタの侵攻を阻止するのに成功する。

アルケステイス(Alkestis)の物語は、エウリピデスが『アルケステイス』という劇にしている。ペライ王アドメトス(Admetos)は、死ぬ時が来ても身代わりを差し出せばその死を免れられる、という約束を神から得ている。その時がやってきて、妻アルケステイスが身代わりに死ぬと申し出て、彼女が死んだことによって彼は生き延びる³³。

アキレウスの死の物語は、Homerosの時代からそのまま残っているものであるが、他の2例と同じパターンをなしているといつてよいであろう。すなわち、これら3件のいずれにおいても、altruisticな願いの成就が神の権威のもとで、死と引き換えに保証されているのであり、さらに当人はそのことを認識した上で死を受入れているということである。そして彼らの死の受け入れは、何らかの形で讃嘆の調子で描かれる。このことは先の人身御供の4件とも同じである³⁴。

ここで、スキュラの餌食となった者たちの死の物語を考え合わせてみよう。彼らの死が無駄なものではなく、実益(仲間の海峡通過)と交換された形になっているということは、他の例と同じである。しかし、当人がその死の意義を認識して受け入れたかという点になると、この例だけが他のすべての例と異なっているといえる。そしてまさにその点が、彼らの死を悲痛きわまりな

³³ 実際にはそののち、ヘラクレスが力づくで死神からアルケステイスを奪い返して、彼女も生き返ることになるが、そのことは我々にとっては重要ではない。

³⁴ このほかにも、自らの死と引換えに願いの成就を目指す者が、死という代償を要求した者が人間であり、約束を守らず、その死が無駄になってしまうという場合もある(S. *Antigone*のアンティゴネ、E. *Andromache*のアンドロマケ)。しかしこのような場合でも、主人公達は自分たちの死が無駄にはならないという信念のもとに死を受け入れる形となっているということが重要である。

いものにしてている一端なのである。実益をもたらした貴重な死なのに、彼らの死について一言も肯定的な物言いがなされていないということも、他と大いに違うところである。たしかに、スキュラの餌食の話は Homeros の時代のものであり、古典期に語られた一連の話との違いは、少なからず時代的思潮の違いによるものでもあるかもしれない。しかし、『オデュッセイア』は古典期にも好んで読まれ聴かれていたという事実がある。スキュラの餌食の神話は、古典期にも改変されることなく、あるいは改変されたとしても有力な話形としては残らず、『オデュッセイア』の話形のままのものが、この時代に流行った他の同類の神話とは顕著なコントラストをなしながらも、この神話のスタンダードな形として受け入れられ続けたと考えられる。すなわち、この神話は、『オデュッセイア』に描かれたとおり、たとえ効用のある死でも本人がその意味も知らずに死ぬ、あるいは死なせるというような事態が悲痛なものであることを描いた神話として、古典期においても受け入れられたと考えられる³⁵。

(5) 結論

『オデュッセイア』の第12巻において、オデュッセウスが部下たち6人をスキュラの餌食にしてしまった光景を見るのが、彼にとって最も「嘆かわしい」苦しみであったということは、死に際の彼らの悲痛なそぶりからのみならず、オデュッセウス自身、彼らの死が海峡を通過するための不可欠の代償であることを知りながら、何も知らせぬまま彼らを死なせ、また彼らから恩恵を被っているが彼らのために何もしてやることができなかつた、という事情からくる彼自身の無力感と心苦しさを表したものであったと考えられる。特に、効用ある死を自覚的に受入れることを歓迎し祝福する傾向があった古典期には、その自覚なく死んでしまったスキュラの餌食たちの死の物語は、ひたすら悲痛なるものとして語り継がれたにちがいない。

参考文献

テキストは以下のものを使用した。

T.W. Allen, ed., *Homeri Opera*, tomus III and IV (Oxford, 1908)

ホメロス (松平千秋訳)、『オデュッセイア』、上・下 (東京、1994)

R. Hard, *Apollodorus: The library of Greek Mythology* (Oxford, 1997)

ウェルギリウス (岡道男・高橋宏幸訳)、『アエネーイス』(京都、2001)

³⁵ アテナイの葬礼演説は、戦死者全般に何らかの功績を認めようとし、また、彼らに功績が認められることを、これから死ぬ兵士たちをも含む全市民に知らせようとするものであった。無駄ではない死を自覚的に受入れることをよしとする考え方は、そこに典型的に現れていると考えられる。この点について詳しくは、S. Yoshitake, 'Arete and Achievements of the War Dead: The logic of praise in the Athenian funeral oration', in *War, Culture and Democracy in Classical Athens*, ed. D. Pritchard (Cambridge, forthcoming) を見よ。

その他、論及した参考文献は次の通りである。

- G. Danek, 'Odysseus between Scylla and Charybrids', in *La mythologie et l'Odyssee: Hommage à Gabriel Germain*, ed. A. Hurst and F. Létoublon (Genève, 2002), 15-25.
- I. de Jong, *A Narratological Commentary on the Odyssey* (Cambridge, 2001)
- T. Gantz, *Early Greek Myth: A Guide to Literary and Artistic Sources* (Baltimore, 1993)
- P. Jones, *Homer's Odyssey: A Companion to the English Translation of Richmond Lattimore* (Bristol, 1988)
- K. Reinhardt, 'The Adventures in the Odyssey', in *Reading the Odyssey*, ed. S.L. Shein (Princeton, 1994), 63-132.
- C. Segal, *Singers, Heroes, and Gods in the Odyssey* (Ithaca, 1994)

Résumé**'The Preys of Skylla: Agony of Odysseus'**

In the *Odyssey* it is clear that owing to the deaths of his six oarsmen who became preys of Skylla Odysseus and his other men could pass the dangerous strait before the rock of this monster. Having heard the premonitions of Kirke he had been all aware of this result, but he did not tell them anything about this danger but allowed it to happen to their surprise. He wanted to save them, but could not even have the chance to do so, while totally he owed his own survival to them as well as he had responsibility to their death. It was in this context that he described their death scene as the most lamentable (*oiktiston*) in all his adventures. Their deaths were not in vain after all, but nothing positive was told of their death in this poem. And no renewal was made of this aspect of the myth, though for the Greeks it was a mythical ideal that a man accepts his practical death consciously. The myth of the preys of Skylla was a story that told the agony of Odysseus that he experienced when he allowed his men to die unconscious of the effects of their own death.